

KUBIC 入賞報告

第7期生 千葉 将太・橋本 賢治

◆KUBIC とは…？

2006年に関西大学商学部が創設100周年記念事業の一環としてスタートされたのが、「関西大学ビジネスプラン・コンペティション『KUBIC』」です。懸賞論文ではなく閃いたアイデアを提案するだけではなく、小野ゼミでは、ニュービジネス（起業・社内ベンチャー）を創出できるような、創造



性・専門性・総合力・国際性を兼ね備えた次世代のビジネス・リーダーを発掘・育成するという理念に賛同し、小野先生の共同研究者でもある慶應義塾大学商学部出身の関西大学商学部の岩本明憲先生のお誘いをお受けする形で、2009年から有志参加を始めました。自由応募部門とテーマ部門の2部門から構成されており、前者は、応募者が設定したテーマについてビジネスプランを提案する部門、後者は、協賛企業が設定したテーマについてビジネスプランを提案する部門です。小野ゼミでは、前者を中心に応募しました。審査は、独創性、必要性、優位性、収益性、実現性、社会性、訴求性の7項目を基準にして、ダブルブラインド方式の極めて公正な手順で行われます。今年度、第6期生・第7期生の有志グループ6組が応募し、1組が500組を超える応募者のなかから入賞を果たしました。以下は入賞グループのレポートです。

◆活動後記

10月2日（土）、KUBIC本選会。この日に至るまでには数多くのドラマがあった。ドラマの幕開けは、窮地に陥った2者が1つの条約を締結したことにあった。良いプラン案が思いつかない千葉と、アイデアは沸くがそれをプラン化することができない橋本。この2者が互いの弱みをカバーしあうため、力を合わせるようになった。

条約締結は功を奏し、われわれは6つの案を提出することに成功した。プランを提出し終えた橋本、千葉の顔は安堵の色に溢れていた。このとき、我々がまさか本選会に残ることができるとは夢にも思っていなかった。

寝耳に水とはこのことをまさに言うのだろう。見知らぬ番号、「06—」からかかってきた電話を何気なくとる。「いまさら内定取り消しか？」などと多少の恐怖におびえながらとったその電話の先にいたのは、関西弁の女性だった。言っていることがはじめはよくわからなかったが、本選会への出場を依頼されているのだと、少し間をおいてからわかった。ドッキリではないだろうかと思いつつも、プラン名を尋ねてみると「リボピタンDグミ」だというから驚きである。そんなこんなで、我々は新たなスタートを切ることになった。

橋本の内定先は言わずと知れたリボピタンDの製造元、大正製薬である。我々を出すぎた真似だとしり

つつも、橋本の特権を生かして大正製薬のブランドマネジャーからアドバイスをしてもらおうと考えた。訪問当日。対面形式で、雑談のようにアドバイスをいただこうと想定していた我々が甘かった。現地に着くと、おもむろにプレゼンテーションを行う壇上へ通された。そこには錚々たる社員の方々が並んでいた。今後もこのような無茶ぶりを受けて橋本は成長していくのだな、と千葉は傍で思いつつ、スライドをめくるために「Enter キー」を懸命に押し続けた。発表が終わり、フィードバックを頂くことになった。さすがは、天下の大正製薬のブランドマネジャー。我々の稚拙なプレゼンテーションに対して、貴重なアドバイスを惜しみなく、溢れんばかりに下さった。また、ブランドマネジャーに取り次いで下さった人事部の方々からは、リポビタンD グッズとおいしい夕飯をいただき、非常に有意義な訪問となった。このご恩をお返すするためにも悔いのない結果を残そうと我々は誓いを立てたのだった。

我々の拙いプレゼンテーションを改善するために、ゼミ合宿のひと時を割いて模擬プレゼンが開かれた。我々は合宿先へのバスのなかでも発表準備を行い、万全の態勢で発表に臨んだ。発表の際には先日の訪問の際にいただいた「リポジャン」(大正製薬社員が販売促進を行う際に着用するとされるジャンパー)を着用し、大正製薬社員になりきって発表を行った。先生をはじめ、先輩方、同期、後輩からさまざまなご指摘をいただき、非常に実りのある時間となった。秋学期第1回目の本ゼミで、再び模擬プレゼンの機会を頂いた。ゼミ合宿で指摘していただいた点を修正し、なおかつ大幅に改編した資料を用いて発表を行った。ここでは発表の仕方についてさまざまなアドバイスをいただいた。こうして、その週末、本番を迎えた。

発表直前の昼休みに最終調整を終えた我々は、500人は収容できるであろう大ホールで、NICONICO48という奇妙なチーム名とリポビタンD グミという奇抜なプランをひっさげ、発表を行った。このプランは、大正製薬がグミ世界最大手企業ハリボーとアライアンスを結び、グミの製造を行うというものであった。

心配していた質疑応答も難なくクリアし、昨年の屈辱を晴らせたかに思えたが、しかし！結果は、昨年と同じく優秀賞どまり。昨年の経験を生かして望みは高く、優勝を狙っていただけに、悔しかった。ビジネスプラン提案の難しさを実感した我々であったが、プレゼンテーションは多くの方から褒めていただいた。大手を振って東京に凱旋できる結果ではなかったが、大変良い経験ができたと思っている。

最後に、6月の1次提出からご指導して下さいました小野先生、そしてプレゼンテーションの度に貴重なアドバイスを下さった院生の先輩方、7期・8期のみんな、パワーポイント作成に協力してくれたまっつん、ゆかりん、きみしょー、あんちゃん、氏田、当日駆けつけてくれたなおひろと、再びまっつん、そして、このような貴重な機会を与えて下さった岩本先生をはじめとする関西大学の方々、さらには、貴重なアドバイスを下さった大正



リポジャンに着替えてのプレゼン@関西大学
(左が千葉、右が橋本)

製薬の方々に対して、心から感謝したい。

1年越しの思い。去年とは違う風が吹いていた。コンビを組むちばしょとは、もう長い付き合いだった。あいつのことは自分のことのようにわかるし、自分のことを、あいつも自分のことのようにわかってくれる、そんな信頼感があった。大正製薬にも行った、自分たちの全力に、全力でもって応えてくれる、先輩社員の方々があった、嬉しかった。ヒルトンホテルに泊まった、怖いものなんて何もなし、そんな、2度目の関西の夜だった。当日、会場、そこには、仲間がいた。なおひろがいた、まっつんがいた、会場に集まってくれたすべての関大生と、1つになった。結果、負けた。果たして、そこには、何も残らなかっただろうか？ いや、そんなことはない！ たった1つ、いや、2つ、そこには、確かに青いジャンパーが残った。

橋本 賢治

夜を徹しての作業、リポジャンを着てのプレゼンに、企業訪問、ヒルトンホテル宿泊などなど、今思い返してみるととてもいい経験ができたなあと思います。6月の1次提出からご指導して下さいました小野先生、そしてプレゼンテーションの度に貴重なアドバイスを下さった大学院生の先輩方、7期・8期のみんな、パワーポイント作成に協力してくれたまっつん、ゆかりん、きみしょー、あんちゃん、氏田、当日駆けつけてくれたなおひろと、まっつん、そしてこのような貴重な機会を与えて下さった岩本先生をはじめとする関西大学の方々、さらには、貴重なアドバイスを下さった大正製薬の方々、本当にありがとうございました。後輩には僕らを超えて、来年はぜひとも優勝を勝ち取ってきてほしいと思います。

千葉 将太



懇親会にて（左から松本、千葉、岩本先生、橋本）